

「ローマに在りては、ギリシア人のごとく振る舞え」 天道 公平

私がこの言葉に出会ったのはいつだったか、もう記憶にはないが、随分長い間、喉元に突き刺さった魚の小骨のように気になってしょうがない言葉であった。

意味は判るし、英語のことわざをもじった表現であることもわかる。それだけのことならば、とつくの昔に忘れ果てていた言葉だろうが、そうはならなかったのは、こう言ったのがケネス・バークであることを知っていたからである。

私に理解できなかったのは、K・バークほどの人物が何故こんなことを言ったのかということである。「ローマに在りては、ギリシア人のごとく振る舞え！」と言うことによって、いったい彼は何を言いたかったのか？ それが判らなかつた。

ある時ふと、この言葉はただの一例に過ぎないということに気が付いた。千変万化しながらどこまでも続く表現の一部に過ぎないということに。

「ローマに在りては、ギリシア人のごとく振る舞え！」ということ、当然の事ながら、「アテネに在りては、ペルシア人のごとく振る舞え！」ということである。ペルセポリスに在りてはインド人のごとく、デリーに在りては中国人のごとく、北京に在りては日本人のごとく、東京に在りてはアメリカ人のごとく、ニューヨークに在りてはイギリス人のごとく、ロンドンに在りてはイタリア人のごとく、ローマ

に在りては……と、地球を一周する言葉である。次の一周はまた別の経路を辿ることになる。

世界中のどこでも通用しそうな「郷に入りては郷に従え！」というありきたりの格言に昂然と反旗を翻し、そんな常識に囚われてはならないと迫っているのである。

そんな風に思えるようになった頃、一冊の本に出会った。『オリエンタリズム（上）（下）』（エドワード・W・サイード著、今沢紀子訳、平凡社ライブラリー）である。

この著作の中で、E・サイードは、E・アウエルバツハからの孫引きで、サン・ヴィクトルのフーゴー（神秘主義的スコラ哲学者、1096〜1158）の『ディダスカリコン』の一節を引用している。

「故郷を甘美に思う者はまだ嘴の黄色い未熟者である。あらゆる場所を故郷と感じられる者は、すでにかなりの力をたくわえた者である。だが、全世界を異郷と考えるこそ、完璧な人間である」

この引用を読んだ時に、K・バークの言葉は初めてストンと私の腑に落ちた。長年気になって仕方がなかった「ローマに在りては、ギリシア人のごとく振る舞え！」とは、そうか、「成熟せよ！」という私宛のメッセージだったのか、と。

こんなことに気付くまでに、三十年の歳月が流れている。歲月人を待たず。光陰矢の如し。人生は短い。（二〇二四・三・三二）

【註】

——ケネス・バークやエドワード・サイドやエーリヒ・アウエルバッハを全く知らなくても、私の書いた文章を読むにはあまり影響はないだろうと思うが、ひとつだけ、サン＝ヴィクトルのフーゴの『デイダスカリコン』からの引用について補足しておく。

引用は『オリエンタリズム』での今沢紀子さんの翻訳に従ったが、『デイダスカリコン（学習論）——読解の研究について』は邦訳もされているので紹介しておこう。

★『中世思想原典集成 第九巻 サン＝ヴィクトル学派』（上智大学中世思想研究所編、平凡社）

こんなものまで日本語で読める状態になっているという事実を目にすると、私はイエズス会という組織の強靭さに驚きを禁じ得ない。

【追記】

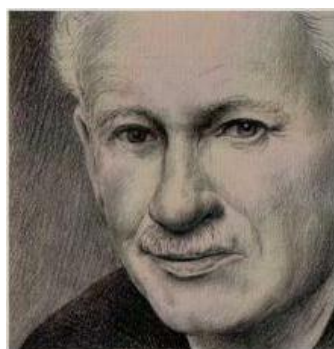
——上記の文章を書いた後で、ナシム・タレブの『ブラック・スワン 不確実性とリスクの本質』（ダイヤモンド社）の事を思い出した。

ナシム・タレブはこの著作をブノワ・マンデルブロに捧げているのだが、その献辞に彼はこう書いている。

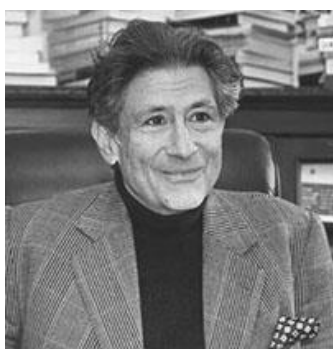
「誰も彼もがローマ人の中にあって、マンデルブロは一人

ギリシア人である」

ケネス・バークやサン＝ヴィクトルのフーゴの言葉と並べて読むと、なかなか含蓄のある表現である。こういうメタフォリカルな表現の孕む多義性に翻弄されるのが私には心地よい。



ケネス・バーク



エドワード・W・サイド



エーリヒ・アウエルバッハ



サン＝ヴィクトルのフーゴ